OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	京都市方言における「ノヤ」「ネン」の異同
Author(s)	松丸, 真大
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 1999, 1, p. 61-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23167
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

京都市方言における「ノヤ」「ネン」の異同

松丸真大

【キーワード】スコープの「のだ」、ムードの「のだ」、対事的ムードの「のだ」、対人的ムードの「のだ」

1. はじめに

京都市方言には、「ノヤ」「ネン」という形式があり [1]、どちらも共通語の「のだ」にほぼ相当する意味を担っていると言われている。これらの形式は、大阪・滋賀・奈良などの関西地域全般で広く用いられているが、当該方言のものと比較すると、意味・用法などの点で若干の違いが認められる。本稿では、これらの形式における地域的な差異にはふれない。本稿の目的は、京都市内で用いられるこれら2形式について、当該方言を母方言とする筆者の内省を基に、その意味・用法の異同を記述することである。

以下では、2.で「ノヤ」「ネン」が類似していることを確認し、これらの形式の形態的な点について少しふれた後、3.で現代日本語研究における「のだ」の先行研究の枠組みを検討する。4.ではこの枠組みを援用し、「ノヤ」「ネン」の2形式を比較し、その異同を明らかにしたい。更に5.では「ノヤ」「ネン」が文の中のどの位置に生起するかという点から2形式の比較を試みる。

2. 対象とする形式

本節では、「ノヤ」「ネン」の2形式がある点では類似しているが、その他の点では異なるということを確認する(2.1.)。その後、2形式が形態変化の点で異なること(2.2.)、現れることが出来る文にも差異が見られること(2.3.)を示す。

2.1. 類似点・相違点

まず、2形式がどのような点で類似しているかを示す。

(1) A：明日、映画行かへん？
　　B：やめとくわ。忙しいンヤ。　　(忙しいんだ)

(2) B：やめとくわ。忙しいネン。　　(忙しいんだ(よ))

(1)(2)の「ンヤ」と「ネン」は、どちらも共通語の「のだ」に相当し、ほぼ同じ意味を表す。どちらの形式も、「やめとく」の「説明」または「背後の事情」として「忙しい」という事態を提出し、それを「ノヤ」或いは「ネン」で状況(「映画に行くのをやめておく」)と結びつけていると考えられる。これら2形式は、(1)(2)のような文脈ではほぼ同じ意味で用いられていると考えられる。

しかし、そのほかの文脈では異なったふるまいを見せることがある。以下のようなものである。

(3) 悲しくて泣いて｛るンヤ/＊んネン｝ない。嬉しくて泣いて｛るンヤ/んネン｝。

(4)　山田さん　来一へんなぁ。きっと用事があ｛るンヤ/＊んネン｝。

(3)(4)からだけでもわかるとおり、「ネン」は「ノヤ」に比べると現れることが出来る環境が限られている。以下では、このような2形式の差異について具体的に考察する。

2.2. 形態

本節では、「ノヤ」「ネン」が、否定形式・過去形式を伴う場合にそれぞれどのような形態をとるのかを簡単に整理しておく。併せて、「ノヤ」「ネン」の前に付く述語が否定形式・過去形式を伴う場合も、「行く」という動詞を例に以下の表に示す。

(5)「ノヤ」の形態

		「ノヤ」		
		φ	ーナイ	ータ
述語	φ	イク-ンヤ	イク-ンヤナイ	イク-ンヤッタ
	ーナイ	イカヘン-ノヤ	イカヘン-ノヤナイ	イカヘン-ノヤッタ
	ータ	イッタ-ンヤ	イッタ-ンヤナイ	イッタ-ンヤッタ

(6)「ネン」の形態

		「ネン」		
		φ	ーナイ	ータ
述語	φ	イク-ネン		
	ーナイ	イカヘン-ネン		
	ータ	イッ-テン		

(5)のように「ノヤ」は、過去形・否定形の場合も、また前に付く述語の形態にかかわらず、「ノ+ヤ」という形を保っている。それに対して、「ネン」は(6)のように過去形・否定形という形を持たず、また、述語が過去形式を伴う場合には、そのテンスマーカーである「タ」を取り込んで、「テン」という融合形になる。このように、形態的な点からだけでも、「ノヤ」は広い範囲に生起可能であり、準体助詞「ノ」+助動詞「ヤ」という機能をあまり失っていない分析的な形式であることがうかがえる。逆に、「ネン」は生起できる環境が限られており、形態的に「ノ+ヤ」という形に復元できない統合的な形式であることがわかる。

ここで、「ノヤ」は「ノ+ヤ」の機能をあまり失っていないと述べたが、やはり「ノヤ」は、準体助詞「ノ」+助動詞「ヤ」としてではなく、「ノヤ」一語として扱うべきである。野田(1997)では、三上(1953)で指摘された「ガノ可変」という名詞が持つ性質を、準体助詞の「の」と「のだ」とを区別するテストとして用いているが、(7)のように「ノヤ」においても「ガノ可変」は成立しない。[2)]

(7)佐藤さん｛ガ/ノ｝来る日を教えて下さい。

(8)佐藤さん｛ガ/ノ｝来るのが遅れた。

(9)佐藤さん｛ガ/＊ノ｝来るンヤ。

したがって、「ノヤ」は、もはや「ノ+ヤ」という二語からなるものではなく、一語の助動詞として用いられていると考えられる。

2.3. 文タイプとの共起

ここでは、2 形式がどのような文タイプと共起しうるかを見る。まず、文の形式的なタイプとの共起を見る。

(10) お前が行く {＊ンヤ/＊ネン} ！ 【命令文】
(11) お前が行く {ンカ/＊ネンカ} ？ 【疑問文】
(12) お前が行く {ンヤ/ネン}。 【平叙文】

以上のように、「ノヤ」は命令文では（命令形を持たないために）用いることが出来ず、疑問文・平叙文では用いることが出来る。これに対して、「ネン」は平叙文でしか用いることが出来ない。

次に文の機能的なタイプとの共起を見る。

(13) 立て！立つ {ンヤ/＊ネン} ！ ジョー！ 【働きかけ】
(14) 誰が行く {ンヤ/＊ネン} ？ 【問いかけ】
(15) 水が欲しい {ンヤ/ネン}。 【表出】
(16) 今日 会議が 3 時にある {ンヤ/ネン}。 【述べ立て】

(13)-(16)が示すように、「ノヤ」は全ての文タイプと共起できる。これに対して、「ネン」は、【働きかけ】【問いかけ】の文とは共起しない。[3] 【述べ立て】については少し補足が必要であろう。【述べ立て】には(16)のような判定文の他に、いわゆる現象描写文も含まれるが、これについては、2 形式共に不適格となる。[4]

(17) あっ、荷物が落ちる {＊ンヤ/＊ネン}。

上述の点をふまえ、4.で具体的に 2 形式の差異を分析する。

3. 先行研究

本節では、先行研究を確認し、問題点を明らかにする。まず、3.1.では「ノヤ」「ネン」に関する先行研究を検討する。3.2.では現代日本語研究における「のだ」の研究をいくつか取り上げ、本稿の立場を明らかにしたい。

3.1. 「ノヤ」「ネン」に関する先行研究

近畿方言の「ネン」を扱い、その中で京都市方言の「ネン」にふれたものに藤原(1982)がある。また、京都府方言の概説の中で「ネン」に言及されているものもある(中井 1997)。これらの先行研究の要点をまとめると、以下のようになる。

i） 「ネン」は、「ノヤ」を出自とし、「ノヤ」の変化形とされている。 (藤原 1982)
ii） 「ノヤ」と「ネン」は類似した意味を表す。 (藤原 1982)
iii） 「ネン」は、もともと京都市内では用いられておらず、大阪或いは京都府南部のものが市内に入って、現在では市内でも用いられている。(中井 1997 : 21)
iv） 「ノヤ」は「のだ」に相当し、「ネン」は「のだよ」に相当すると考えられる。意味のずれは未詳。 (中井 1997 : 21-22)

また、播磨方言の「ネン」「テン」を扱った神部(1996 : 68)に以下のような言及が見られる（[ ] 内は筆者）。

> いわゆる原形式［ノヤ］と変化形式［ネン］とは、上述のように並存してはいるが、それぞれが、個別独自の意味作用を見せるようになっている。「ネン」は、基本とし

て、「ノヤ」よりもいっそう断定機能が薄れ、告知・説明の意味作用が勝っていると解される。

このように、「ノヤ」と「ネン」の意味のずれは報告されてはいるが、その詳細な記述は見当たらない。これらの先行研究を踏まえ、本稿では京都市方言における「ノヤ」と「ネン」の意味の違いを記述する。また、ここでは「ネン」の出自についての言及も取り上げているが、この点については最後にふれる。

3.2. 「のだ」に関する研究

本節では、現代日本語の「のだ」に関する研究を検討する。まず、3.2.1.で「のだ」に関する最近の二つの立場について述べ、そのうち本稿と関係する野田(1997)について 3.2.2. で検討する。

3.2.1. 「のだ」に関する二つの立場

現代日本語における最近の「のだ」研究の中で主なものに、田野村(1990a,1993)と小金丸(1990)、野田(1997)がある。この 2 つの研究は、「のだ」の意味・機能をどう捉えるかという点で異なった立場をとる。簡単にまとめると、田野村(1990a,1993)の立場は、

ⅰ) 「のだ」の基本的な意味・機能は、ある具体的なことがらをうけてその「背後にある事情」を表すことである　田野村(1990：5)

ⅱ) 「ことがら」が具体性を失っている場合にも、「のだ」は「実情」という、より広い意味・機能をもつ　田野村(1990：6)

というものである。

これに対して、野田(1990,1997)は、

ⅲ) 「のだ」の意味・機能を「ムードの「のだ」」と「スコープの「のだ」」とに大きく二分する　野田(1997：20)

ⅳ) 「ムードの「のだ」」は「対人的」か「対事的」かという特徴と、「関係づけ」か「非関係づけ」かという特徴から更に 4 つに分類される　野田(1997：67)

とする。いいかえれば、この 2 つの立場は「のだ」(特にノデハナイ)に「スコープ」という、命題に対する否定などの影響範囲を広げる機能を認めるか否かで異なっていると考えられる。

本稿では、「ノヤ」「ネン」の差異を見るために、より細かい分類を行っている野田(1997)の枠組みを参考にし、考察をおこなっていく。

3.2.2. 野田(1997)

ここでは、野田(1997)の枠組みについて少し述べる。上述のように、野田論文では「のだ」を「ムードの「のだ」」と「スコープの「のだ」」とに大きく二分する立場にたつ。

まず「スコープの「のだ」」とは、否定文・質問文などに顕著に見られるもので、「の」によって前接する文を名詞化することによって否定・疑問のスコープを広げる機能を果たすものである。以下に例を示す。([ ]は否定のスコープ、波線は否定のフォーカスを表す。)

(18) [悲しくて泣いてる] んじゃないのよ。[嬉しくて泣いてる] んだよ。

(19)??悲しくて泣いてない。

(20)［私に聞いてる］んですか？

(21)??私に聞いてますか？

(18)では、「泣いてる」という事態は否定されておらず、その理由である「悲しくて」が否定のフォーカスになっている。これは、(19)でわかるように、「のだ」のない文では成り立たず、「泣いている」という事態が否定されてしまう。同様に、質問文(20)も「のだ」によってスコープを広げ、「私に」を質問のフォーカスにしている。「のだ」がない文(21)は「聞いている」をフォーカスにしてしまい、不自然となる。また「スコープの「のだ」」には、「枠組み固定文」と呼ばれる、以下のようなものもある。

(22)［その人間がポリシーを決める］のではない。

［ポリシーがその人間を決定する］のだ。

これは、事態に関与する要素の間に、「ある関係が成立することは前提としたうえで、その関係において、それぞれの要素が果たす役割を問題にするもの」(p.54) である。

次に「ムードの「のだ」」に関しては、更に(23)のように4つに下位分類されている。(野田論文によれば、Pとは「のだ」が用いられた時の「状況や先行文脈」(p.68)であり、Qとは「のだ」に「前接する部分」(p.64)である。) 同時にそれぞれの「のだ」に対応する例文もあげておく。

(23)

	対事的ムードの「のだ」	対人的ムードの「のだ」
関係づけ	Pの事情・意味として Qを把握する	Pの事情・意味として Qを提示する
非関係づけ	Qを(既定の事態として) 把握する	Qを(既定の事態として) 提示する

(24) 山田さんが来ないなぁ。きっと用事があるんだ。 【対事的・関係づけ】

(25) そうか、このスイッチを押すんだ。 【対事的・非関係づけ】

(26) 僕、明日は来ないよ。用事があるんだ。 【対人的・関係づけ】

(27) このスイッチを押すんだ！ 【対人的・非関係づけ】

(野田 1997：67より抜粋；【】内は筆者)

「対事的ムードの「のだ」」(24)(25)は聞き手を特に必要とせず、「～と思う」の補文に入ることができる。これに対して「対人的ムードの「のだ」」(26)(27)は聞き手を必要とするもので、「のです」「の」と置換可能である。一方、「関係づけの「のだ」」と「非関係づけの「のだ」」は連続的なものと認めた上で、状況や先行文脈に関係づけるか否かで一応分類される。

以下、野田論文で分類されたそれぞれの「のだ」に対応した文で、「ノヤ」と「ネン」が適格かそうでないかという観点から、「ノヤ」と「ネン」の違いについて見ていく。

4. 「ノヤ」「ネン」の意味・用法の異同

本節では、3.2.2.で見た野田論文の枠組みを参考に「ノヤ」「ネン」の2形式を比較する。まず、4.1.で「スコープの「のだ」」に対応する文について、4.2.で「ムードの「のだ」」に対応する文について考察する。4.3.では本節のまとめを述べる。

4.1. スコープの「のだ」

ここでは「スコープの「のだ」」に対応する文について「ノヤ」と「ネン」を比較する。

まず否定文・疑問文について考える。「ノヤ」の場合、どちらの文にも問題なく現れることができる。

(28) ［悲しくて泣いてる］ンヤないのよ。［嬉しくて泣いてん］ノヤ。

(29) ［君が行く］ンカ？

(30) ［{何で/どこに/誰が} 行く］ンヤ？

これに対して、「ネン」は、2.2.(6)で見たように、否定形式を後接することができない。疑問文についても同様、2.3.(11)(14)で確認したように、疑問文と共起することができず、また問いかけとして機能することもできない。したがって、疑問文・否定文に関しては、「ノヤ」が「のだ」と平行しているのに対して、「ネン」は否定・質問のスコープを広げる機能をもっていないと考えられる。

次に肯定文について見る。肯定文の場合は、否定文や質問文を先行文脈として設定しなければ、フォーカスの位置（したがってスコープの範囲）がはっきりしない。

(31) （悲しくて泣いてるンヤないのよ。）［嬉しくて泣いてん］{ノヤ/ネン}。

(32) （私に聞いてるンカ？）［お前に聞いてる］{ンヤ/ネン}。

以上のように文脈の支えがあれば、「ノヤ」「ネン」共にフォーカスを述語以外におくことができる。しかし、これは文脈によってフォーカスの位置が明示されただけであり、「ノヤ」「ネン」がスコープを広げた結果とは考えにくい。したがって、この文で2形式がスコープを広げる機能を果たしているとは思えない。また、先行文脈がない場合には、「スコープの「のだ」」の解釈だけでなく「ムードの「のだ」」の解釈も可能である。

(33) 嬉しくて泣いてん {ノヤ/ネン}。

(34) お前に聞いてる {ンヤ/ネン}。

このことから、上記のような肯定文では、「ノヤ」「ネン」は基本的に「ムード」と「スコープ」の両方の解釈を許すものであることがわかる。フォーカスを述語以外におくには文脈の支えが必要になる。この点では、2形式に違いはない。

しかし「スコープの「のだ」」の解釈しか許さない「枠組み固定文」や「〜のは〜のだ」型の文では、「ネン」がやや不自然になる。これらの文型は、野田論文で「スコープの「のだ」」と「ムードの「のだ」」を分ける根拠として用いられているものである。

(35) ［太ってるから食べる］ンヤない。［食べるから太ってる］{ンヤ/？ネン}。

(36) チップを誤魔化すのは、店の金を誤魔化したンヤない。
それは店で働く者たちの金を誤魔化し {たンヤ/＊テン}。

(35)(36)から、「ネン」は肯定文でも、「スコープの「のだ」」の解釈しか成り立たない文型では、不自然になることがわかる。したがって、「ネン」は基本的にスコープを広げる機能をもっていないと考えられる。

ここでは、「スコープの「のだ」」に対応する文で、2形式の差異を確認した。まとめると、「ノヤ」は「のだ」と平行的で、スコープを広げる機能をもつ。一方、「ネン」は基本的にそのような機能はもっていない。ただし、肯定文で、文脈の支えがあり、ムード的解釈が可能な文型の場合に限り、フォーカスを述語以外におくことができる。また、2.2.(6)でも確認したが、「ネン」は否定にすることができない。ここから、「ネン」がムード形式

として専ら用いられていることがわかる。更に、2.3.(11)(14)で見たように、「ネン」は疑問文と共起できず、問いかけとしても機能しない。疑問文は一般に、命題の真偽判断が話し手にとって「不確定」であり、その判断を放棄したことを示すとされる。このことと上の事実とを考えあわせると、「ネン」は、命題の真偽判断が話し手にとって「確定」の場合にしか用いられない形式であると考えられる。

4.2. ムードの「のだ」

ここでは、「ムードの「のだ」」に対応する文について2形式を比較する。野田論文では(23)のように「ムードの「のだ」」を4つに分類していたが、ここでは2形式の差異が顕著に出ると思われる「対事的「のだ」」(4.2.1.)と「対人的「のだ」」(4.2.2.)に大きく分け、議論をすすめる。「関係づけの「のだ」」と「非関係づけの「のだ」」については、それぞれの節で論ずることにする。

4.2.1. 対事的「のだ」

対事的「のだ」とは、「話し手が、それまで認識していなかった事態Qを発話時において把握したことを示すものであり、必ずしも聞き手を必要としない」(野田 1997：80)ものである。この事態Qを状況や先行文脈Pと関係づけるか否かで、「関係づけ」「非関係づけ」に分類される。

まず、関係づけの対事的「のだ」について見てみる。以下にあらためて例を示す。

(37) 山田さんが来ないなぁ。きっと用事があるんだ。 (=(24))

(38) [友人が運転しているのを見て]「あ、あいつ、運転するんだ。」

(37)はP(山田さんが来ない)の事情をQ(きっと用事がある)として把握した場合、(38)は個別状況P(友人が運転している)をQ(運転する)という恒常的事態として把握したものである。これを「ノヤ」「ネン」で置き換えてみると、「ノヤ」の場合は自然だが、「ネン」の場合は不自然となる。

(39) 山田さん 来一へんなぁ。きっと用事があ{るンヤ/*んネン}。

(40) 「あ、あいつ、運転す{るンヤ/*んネン}。」

(39)(40)で「ネン」を用いるためには聞き手が必要となることから、「ネン」は不適格となる。このように、関係づけの対事的「のだ」の用法では、「ノヤ」を用いることは出来るが、「ネン」は用いることが出来ない。

次に、非関係づけの対事的「のだ」について見る。非関係づけの対事的「のだ」は、話し手が認識していなかった事態Qを、既定の事態として把握した場合に用いられる。以下のようなものである。

(41) [部屋に入ってきて]「え、こんなに一杯いるんだ。」

(42) A：伊達が勝ったって
B：へーえ、伊達が勝ったんだ

(43) そうだ、今日は会議があったんだ。

(44) そうか、このスイッチを押すんだ。 (=(25))

(41)は、状況Pをそのまま Q という語句で把握した場合、(42)は先行する語句Qをそのままの形で把握した場合、(43)は以前認識していたことを再認識した場合、(44)は話し手がと

るべき行動をQという語句で把握した場合である。これらの「のだ」を「ノヤ」「ネン」に置き換えると、いずれの例も「ノヤ」が自然で、「ネン」が不自然となる。

(45)　「え、こんなに一杯い｛るンヤ/＊んネン｝。」

(46)　B：へーえ、伊達　勝っ｛たンヤ/＊テン｝

(47)　そうや、今日は会議があっ｛たンヤ/＊テン｝。

(48)　そうか、このスイッチを押す｛ンヤ/＊ネン｝。

「関係づけ」の場合と同様、「ネン」が聞き手を必要とするために、(45)-(48)で「ネン」が不自然となる。

ここでは、対事的「のだ」にあたる文について「ノヤ」と「ネン」を比較した。「ノヤ」は対事的モダリティの用法で用いることが可能であること、「ネン」は対事的な用法では用いることができないことがわかった。したがって、「ネン」は聞き手を必ず必要とする形式である。また、意味の点からいえば、「ネン」は話し手が事態を把握する場合には用いられないことがわかる。「関係づけ」「非関係づけ」の分類と「ノヤ」「ネン」の差異との間には、関係がみられない。

4.2.2.　対人的「のだ」

対人的「のだ」とは、「聞き手は認識していないが話し手は認識している事態Qを提示するときに用いられるものであり、必ず聞き手(読み手)を必要とする」（野田 1997：91）ものである。ここでも、状況や先行文脈Pの事情・意味としてQを提示するか否かで「関係づけ」「非関係づけ」に分類される。

まず関係づけの対人的「のだ」について見る。以下に例を示す。

(49)　佐藤さんはいないよ。旅行にいったんだ。

(50)　東京に行きたいんだ。行き方を教えてくれ。

(49)のように先行する発話の事情 Q を提示するものもあれば、(50)のように依頼などの前置きとして、後からくる発話の事情Qを提示するものもある。これらの用法では、以下のように「ノヤ」「ネン」どちらにも置き換えることが出来る。

(51)　佐藤さん　いーひんで。旅行にいっ｛たンヤ/テン｝。

(52)　東京に行きたい｛ンヤ/ネン｝。行き方　教えてくれ。

このように、聞き手の存在を必要とする対人的「のだ」に対応する用法では、「ノヤ」「ネン」は同じように用いることができると言える。本稿冒頭の例(1)(2)は、この用法に当たる。

次に、非関係づけの対人的「のだ」について考察する。非関係づけの対人的「のだ」は、聞き手は認識していないが話し手は認識しているQを既定の事態として提示し、それを認識させようという話し手の心的態度を表す。Qが既定であることをことさらに示す場合などによく用いられるようである。

(53)［傷心のBに無神経な事を言った後でAが］

A：あ、ごめん

B：いいの、いいの。

(54)　立て！立つんだ、ジョー！

(55)［母親に向かって］今日は絶対徹夜するんだ。

対人的・非関係づけの「のだ」は、上例のように様々なニュアンスを伴って用いられる。

(53)は Q が既定であることをことさらに示すものであり、(54)は「のだ」の命令の用法である。(55)は話し手の意志を聞き手に述べ伝えるものである。これらの文を「ノヤ」「ネン」で置き換えると、以下のようになる。

(56) B：ええ {ンヤ/ネン}、ええ {ンヤ/ネン}。

(57) 立て！立つ {ンヤ/*ネン}、ジョー！

(58) ［母親に向かって］僕、今日は絶対徹夜す {るンヤ/んネン}。

(57)を除き、いずれの例も2形式共に適格となる。「ネン」の聞き手が必要であるという条件を満たしているためと考えられる。(57)のような命令用法で「ネン」が不適格となることは、2.3.(13)で既に確認した。ここで、4.1.で考察した、「ネン」は命題が話し手にとって「確定」である場合にしか用いられない、ということを再び考えたい。「ネン」は命令用法で用いることができないが、これも「ネン」の「確定性」と関係があると考える。命令（行為指示）とは一般的に「話し手が望む聞き手の未来の行為」を命題とする。命題が「聞き手の未来の行為」であるために、話し手はその真偽判断ができない（真偽の問題ではなくなる）。このことと「ネン」の「確定性」とが合わないため、「ネン」が命令用法で不適格になると考えられる。

ここでは、対人的「のだ」に当たる文における「ノヤ」「ネン」の差異を考察した。対人的ムードの用法では、2形式は基本的に同じである。ただし、「ネン」には命令用法がない。また、ここでもやはり「関係づけ」「非関係づけ」の分類は2形式の差異と関わっていない。

4.3. 本節のまとめ

以上 4.1.-4.2.では、野田論文の枠組みを援用し、「ノヤ」「ネン」の意味・用法を比較した。その結果、「ノヤ」は「のだ」に対応した意味・用法を持つこと、「ネン」はその用法が限られ、対人的ムードの「のだ」に対応する用法でしか用いることができないことが明らかになった。「関係づけ」か「非関係づけ」かの分類は「ノヤ」「ネン」の差異には影響しない。[5]以上の比較結果をまとめると、2形式の差異は表(59)のようにまとめられる。

(59)

	スコープの「のだ」	ムードの「のだ」			
		対事・非関係	対事・関係	対人・非関係	対人・関係
ノヤ	○	○	○	○	○
ネン	×	×	×	○†	○

○：用いることができる　×：用いることができない　†：命令用法はない

この分布からわかる「ネン」の意味・機能としては、この形式がムード形式であること、命題の真偽判断が話し手にとって「確定」であることを示すこと、話し手が事態を把握した場合には用いられず、専ら事態の提示を担うこと、したがって必ず聞き手を必要とすることがあげられる。また、命題が「確定」の場合にしか用いられないことから、命令用法が不適格になると考える。

5. 文中での「ノヤ」「ネン」の位置

本節では、「ノヤ」「ネン」の文の階層構造における位置づけについて考える。

南(1974)は文の階層構造を A～D に分類しているが、田窪(1987)ではそれらをまとめ、以

下のように整理している。(田窪(1987)は主格の位置づけについて(60)を修正しているが、本稿では関連する部分だけを取りだし、その他の部分については省略する。)

(60) A＝様態・頻度の副詞＋補語＋述語
B＝制限的修飾句＋主格＋A＋(否定)＋時制
C＝非制限的修飾句＋主題＋B＋モーダル
D＝呼掛け＋C＋終助詞　　(田窪 1987：38)

野田(1997)では、「スコープの「のだ」」について、連体修飾節との共通性、A 類の従属節には入れず、B 類の従属節の一部に現れうる点、C 類の要素が「のだ」のスコープに入る事が出来ない点、連体修飾節の中に「のではない」が現れる点から、「スコープの「のだ」」を B の段階に位置付けている。また「ムードの「のだ」」に関しては、概言の助動詞との位置関係から対事的「のだ」は C 段階のうち B 段階に近いところ、対人的「のだ」は C と D にまたがるものと位置付けられている。

京都市方言におけるそれぞれの「ノヤ」の位置付けは、上の考察から「のだ」と同じであると考えて良いだろう。ここでは、「ネン」の位置付けについて、「ノヤ」との比較から少し考察してみたい。「ネン」は上の表(59)のように、対人的「のだ」にほぼ対応する。したがって、野田(1997)の考察から C 段階と D 段階にまたがるものであると予想できる。もう少し詳しく考察する。

まず、概言の助動詞との位置関係を見てみる。

(61) 行くラシイ {ンヤ/ネン}。
(62) 行くカモシレヘン {ノヤ/ネン}。

(61)(62)のように対人的「ノヤ」・「ネン」どちらも概言の助動詞の後に位置する。「ノヤ」と「ネン」の現れる位置が異なるのは、以下のような例である。

(63) A：これ、何ですのん？
B：どんでん {ドスネン/＊ネンドス}。
(64) B：どんでん {？ドスノヤ/ナンドス}。
(65) A：どこ、いかはんの？
B：東京 {行きマンネン/＊行くネンマス}。
(66) B：東京 {？行きマスノヤ/行くンデス}。

(63)-(66)のように「ネン」は「ドス(デス)/マス」の前には現れることが出来ず、その後に現れるのが基本である。逆に、「ノヤ」は「デス/マス」の前に現れる方が自然で、後に現れるものは少し不自然である。これは、「デス/マス」という丁寧体の後に「ヤ」という非丁寧体が続くのが嫌われるためとおもわれる。

更に、「ネン」は「ノヤ」の丁寧体である「ノドス」の後にも生起可能である。[6]

(67) (チョッ) タランヨーニ ナッタンドスネン ([GO1] - [S1] :25S)[7]
(68) 足らんよーに なったンドス {？ノヤ/ニャ}。

(68)のように「ノヤ」の場合には「ノヤ」という形式では少し不自然で、音声的により短い「ニャ」という形式でなければならない。そして、この「ンドス」の後の「ネン」は C 類の従属節には入りにくい。(ただし、(72)(74)の文法性判断は人によってゆれが見られるようである)

(71) 足らんよーに なっテンケド、何とかごまかした。

(72)？足らんよーに　ナッタンドスネンケド、貸してもらえへんやろか。

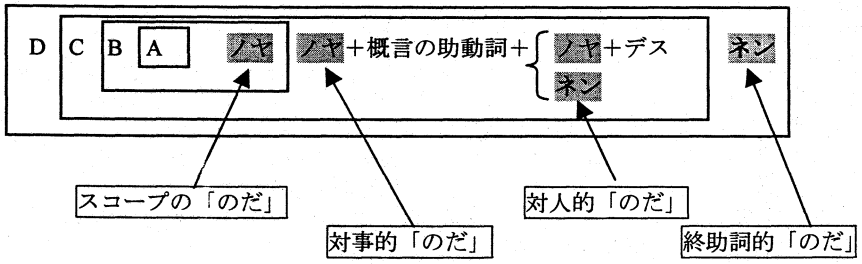
(73)　足らんよーに　なっテンカラ、何とかしてよ。

(74)??足らんよーに　ナッタンドスネンカラ、もっと貸して下さい。

したがって、この場合の「ネン」は終助詞的に用いられているものと考えられる。

以上の考察から、対人的「ノヤ」はCの段階に位置付けられ、「ネン」にはCの段階とDの段階に位置付けられるものがある事がわかった。まとめると、以下の図(75)のようになる。

(75)



6. おわりに

本稿では、京都市方言における「ノヤ」「ネン」の意味・用法の異同を考察してきた。これら2形式の異同をまとめると以下の表(76)のようになる。

(76)

	「ノヤ」			「ネン」
	スコープの「ノヤ」	ムードの「ノヤ」		
		対事的「ノヤ」	対人的「ノヤ」	
①否定になる	○	×	×	—
②疑問文になる	○	○	×	×
③命令文に出来る	×	×	○	×
④聞き手必要	×	×	○	○
⑤「のです」に後接	×	×	×	○

○：条件を満たす　　×：条件を満たさない　　—：形態的に不可能

①の条件については2.2.及び4.1.で考察した。②については2.3.及び4.1.で見た。[8] ③については2.3.及び4.2.2.で考察した。④は4.1.-4.2.の議論から導かれる。⑤については5.の議論の中でふれた。

以上のように、「ノヤ」は「のだ」に相当する意味・用法を有するが、「ネン」は「ノヤ」に比べるとかなり限定された意味を担っていることがわかった。言語変化研究の点から考えると、「ネン」はもともと「ノヤ」を出自とするという言及が多く見られるが、未だ仮説の域をでていない。もっとも、本稿はその議論に新しい材料を直接提供するものではない。というのは、先行研究にもある通り、当該方言の「ネン」は他地域からの流入によって使用され始めたものだからである。しかしながら、地理的分布や音声的特徴からだけではなく、本稿のような意味的・文法的な点からの検討が加えられれば、仮説もより確かなものになるであろう。そのためには、「ノヤ」「ネン」分布の中心地である大阪方言における2

形式の意味的・文法的性質について考えなければならないが、これは今後の課題としたい。

【注】

1) 当該方言には、「ノヤ」を出自とする「ニャ」も用いられるが、本稿ではこれらを区別せず、「ニャ」を「ノヤ」の変異形として扱う。しかし、「ニャ」が生起できる環境は、音韻的条件ではなく、統語的条件によっていることから、この点については更なる考察が必要である。以下に例を示す。

(i) 行く {ンヤ/ノヤ/ニャ}。 (述部が非過去形)
(ii) 行った {ンヤ/？ノヤ/＊ニャ}。 (述部が過去形)
(iii) 行く {ンヤ/ノヤ/＊ニャ} ない。 (「ノヤ」が否定形)

因みに、「ネヤ」「ネ」などの形式は当該方言ではあまり用いられないため、本稿では考察の対象から除く。

2) 野田(1997)では、準体助詞の「の」と「のだ」を区別するテストとして、「ガノ可変」の他に「話しことばでは「の」が「ん」と発音される」か(p.246)というテストも用いているが、それは当該方言の「の」と「のだ」を分けるのには有効ではない。というのは、当該方言では、広く「の」音と「ん」音の交替が見られるため、

(i) 佐藤 来るン 知らんかった。 (佐藤が来るのを知らなかった)
(ii) 佐藤 来るンヤ。 (佐藤が来るんだ。)

のように準体助詞の「の」も「ん」と発音される事があるという理由による（むしろ、「ん」と発音される方が普通である)。

3) ここで少し付け加えておく。【問いかけ】の文(14)は、ここで不適格になっている。この文が下降調で発話された場合は、多分に詰問のニュアンスを帯びるが、聞き手に対する問いかけとして機能しうる。またこの文は、問いかけではないが、反語（「誰が行くんだ。(誰も行かないよ。)」）の解釈もでき、その場合は自然となる。しかし、第一に Yes-No 疑問文の場合(11)には、「ネン」は不適格になること、第二に「ネン」は上昇調と共起できないこと、第三に疑問を表す「カ」と共起できないこと、の 3 点から、「ネン」は基本的に【問いかけ】文とは共起できないと考えられる。

4) これは、現象描写文の「眼前の事態を話し手の主観を加えず言語表現化したもの」という性質と、「のだ」の「文を名詞化することによって、事態を既定のものとする」という性質とが矛盾するためと考えられる。これは「のだ」全般に見られることであり、「ノヤ」「ネン」の差異を浮き彫りにするものではないので、ここでは特にこれ以上は取り上げない。

5) そもそも野田論文でも、この分類に関わる文法的な性質の違いはあげられていない。したがって、この分類は「のだ」が持つ文法的な違いではなく、文脈によって左右される「のだ」の意味の違いであると考えられる。また、「関係づける」か「関係づけない」かという分類名は適当ではないように感じる。むしろ、野田論文の例は P をそのまま言語表現化するかそうでないかの点で異なる。野田(1997 : 73)にあげられている例をみてみる。

(i) [友人の本棚が 5 つあるのを見て、独話で]
「本、たくさん、読んでるんだ（なあ)」
(ii) 「本棚が 5 つあるんだ（なあ)」

(i)は「関係づけ」(ii)は「非関係づけ」とされる。しかしどちらの文も P(本棚が 5 つある)をうけて発話されており、その意味ではどちらも「関係づけ」である。ここでの違いは、(i)が話し手の推論を介して言語化(ここでは把握)されているのに対して、(ii)が P そのままを言語化している点である。したがって、あえて名前を付けるとすれば、「推論介在」と「推論非介在」といったものであろうか。

6) (67)のような「ネン」は、共通語の女性が使う「の」と似ている。

(i) でも、私、あまり服は持っていないんですの。
(ii)＊でも、私、あまり服は持っていないんですのです。

(i)のような「の」は(ii)のように「のです」や「のだ」に置き換えることができない。

7) 筆者の談話資料からの抜粋は、資料番号を付す。また、談話資料からの例の場合には、全てカタカナ表記にする。

8) なお、対事的「ノヤ」が疑問文にでき、対人的「ノヤ」が疑問文にできないことは、5.での「ノヤ」の位置づけから間接的に導かれる。疑問形式「か」が事態の成立に関わる心的態度の範疇に入るとすると、文中では概言の助動詞とほぼ同じ位置にあると考えられる。このことから、対事的「ノヤ」はその内側に位置するため、疑問の対象になるが、対人的「ノヤ」はその外側にあるため、疑問の対象にすることができない。

【引用文献】

神部宏泰（1996）「播磨方言における断定辞の推移－「ネン」「～テン」の成立とその機能－」平山輝男博士米寿記念会編『日本語研究諸領域の視点』明治書院

小金丸春美（1990）「ムードの「のだ」とスコープの「のだ」」『日本語学』9巻3号

田窪行則（1987）「統語構造と文脈情報」『日本語学』6巻5号

田野村忠温（1990a）『現代日本語の文法Ⅰ　「のだ」の意味と用法』和泉書院

――――（1993）「「のだ」の機能」『日本語学』12巻11号

中井幸比古（1997）『日本のことばシリーズ26　京都府のことば』　明治書院

野田春美（1997）『「の(だ)」の機能』くろしお出版

藤原与一（1982）『昭和日本語方言の総合的研究　第三巻　方言文末詞〈文末助詞〉の研究（上）』春陽堂書店

三上章（1953）『現代語法序説　シンタクスの試み』刀江書院（復刊　くろしお出版　1972）

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店

［付記］本稿をまとめるにあたって、岩崎卓氏より有益なご助言をいただいた。記して感謝申し上げます。

松丸真大（まつまるみちお）
大阪大学大学院生　　E-mail: maru8610@let.osaka-u.ac.jp